

少しは大人になっただろうか

坂田三允（長野県看護大学）

学生時代、「職業的調整」という授業があった。5、6人のグループで与えられたテーマについて1週間の間に話しあい、授業の時間にまとめて報告しあって、再度全体で討議するというものである。ある時、「教養」というテーマが与えられた。どのような経過でそうになったかはもう記憶にないのだが、私たちのグループは教養ある人の代表として「花魁（おいらん）」を挙げた。その発表は先生の気に入らなかった。「他人のご主人をとって、奥さんを不幸にするような人を教養があるとは言わない」というのが先生の考えであった。私たちは納得できず、激論(?)を闘わせた。司会を担当していた学生はおそらく大変だったと思う。彼女のまとめは、「花魁にも、教養のある人とそうでない人がいるということなのではないか」という「賢い」ものであった。

以来、私のなかでは「教養とは何か」という問題がくすぶり続けることになった。だから、この書を見つけたとき、ためらわず手にした。著者の専門はドイツ中世史。正直に言って、専門的な知識があれば理解しやすいのだろうと思うところが何か所かあったことは否定できない。それでも、私はこの書に出会えて良かったと思っている。

この書は、「教養とは何か」という題がつけられてはいるが、実は教養という問題を通して世間とは何かということについて、西欧と日本を対比させつつ考察したものである。著者は、教養を身につけるとはどういうことかを考えてゆくと、それは実に曖昧だという。「ときにダンテの『神曲』の一節を空でいえたり、その場にふ

さわしい『聖書』の一節を引用したりすれば教養があると定評ができるだろう」が、出し入れ自由な知識を蓄えることは、コンピュータにもできることである。

しかし、「私たちは『世間』の中で生きて」おり、世間が曖昧な私たちで、私たちの行動や思想を制約している。「大人とは何よりもまず『世間』を知っている人」なのである。しかし、学校教育のなかでは生きていくために一番大切なことは教えてくれない、と著者は指摘する。それは「『世間』に出たときに解るものとされて」おり、「私たちは自分の人生のある段階で『世間』の中にいる自分を発見し、その中で生きていく知恵を周囲の人々の行動を見よう見まねで学び取りながら自分で考え出していくしかない」のである。つまり、世間の中で「いかに生きていくか」という問いが教養の始まりであり、「教養があるということは最終的にはこのような『世間』の中で『世間』を変えてゆく位置にたち、何らかの制度や権威によることなく、自らの生き方を通じて周囲の人に自然に働きかけてゆくことができる人のことをいう」とある。

ああ、そうなのだ、と思う。けれども、それはとても厳しく難しいことのように思える。制度に流されず権威にへつらわず矜持を保てる自分を、私は持っているだろうか。学生時代から見ればすいぶん成長した(?)つもりであったけれど、伝説の花魁と比較して、まだまだ本物の大人とは言えない自分を発見してしまったのだ。▲



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。